

私たちの使命

(和歌山県)

和歌山県立向陽高等学校 二年 武田 理恵

「黒いビニール袋の中には、切り刻まれた息子の制服が入っていたのです。」私はこの言葉を聞いた瞬間、息ができないほど苦しくなった。なぜか。それまで私は語り部からの話を無意識のうちに現実離れした話として捉えてしまっていたことへの後悔と罪悪感が私を襲ったからである。これまで生きてきて命の大切さを学んでこなかった、とかいうことではなく、逆に昔から「命は大切にしなければならぬ」と強く言われてきた記憶がある。そうであるにも関わらず、なぜ私は今回の体験談を聞いて今までに無いショックを受けたのだろう。

思いかえすと、私はこれまで命に関わるような出来事を経験していない。ただ淡々と年を重ね、ドラマのような奇跡体験をしたことももちろん無い。いつしかそんな「何も起こらない世界」が自分の中で「当たり前にある世界」へと変換されてしまっていた。だが、語り部の話を聞いて考えが百八十度変わった。何も起こらないことこそが一番の大切な幸福であり、一番気づきにくい幸福なのである。私は嬉しくなった。十六年間生きてきて、初めて気づくことができた。ここでまた新たに疑問が生まれる。私だけ気づいたところで、何が変わるのだろう。そんなネガティブの塊のような思考におちいりかけていたとき、つい数分前に語り部が言っていたことを思い出した。「息子が持った使命は、幸せの種をまくこと。」「私の使命は何なんだろうって考えてみたのです。」これだ。私は心の中でそう呟いた。語り部の使命が私たち生徒に命の大切さを伝えることなのだとしたら、私、いや、私たちの持つ使命なんてもうすでに分かっているじゃないか。語り部の数十

年分の思いを、ほんのわずかな力であったとしても、必死に私たちへぶつけてくれた言葉のかけらを、広げていくことこそが私の使命なのだ。そう考えると、ネガティブな思考はいつのまにか消えてしまっていた。私のこの気づきを言葉にし、声に出すことでもしかしたら他の誰かが命の大切さを学ぶことの助けになるかもしれない。今書いているこの作文だって、誰かの心を動かすことができるかもしれない。

このような、「誰かの思いを自ら感じ、それを伝える」という一見単純にも思える行為は、実は本当に難しいのではないか。それでも、私にこのことを気づかせてくれたのは何者でもなく、この講演であるのだ。つまり、考えるきっかけを持つことが最も重要なのである。実際、この講演を聞く前と聞いた後で私自身の価値観、物事の考え方感じ方は見違える程変わったであろう。この感動を他人に与えられるような人になりたい、今日出会った語り部のように。そう思った。

前文に記した通り、私はまだ直接命が失われるのを経験したことはない。だが、その時はいつか必ず訪れるものだ。しかし、「その時」が訪れる原因が犯罪であることは許されるものではない。加害者にも被害者にもなってしまう可能性がある私たちは、本当なら生きていたはずの尊い命を胸に、現実から目を逸らさず命の重さ、命の大切さについて考えるべきなのだ。それこそが、私たちの今できる重要な「使命」なのだ。